

メルマガ 「いいテク・ニュース」 季語に遊ぶ 2020 年 6 月 3 日 (Vol.159)

「小原古邨、その版画と俳句」

「小原古邨、その版画と俳句」



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Koson_-_tree-sparrow-and-bamboo.jpg

文明開化の明治時代に生まれ、西欧諸国の文化を感じながらも、生きとし生けるものの自然の営みを慈しむ日本人の豊かな情感を数 100 点にも及ぶ花鳥画に描き、欧米の人々を魅了した日本人画家がいました。

その名を小原古邨（おはら こそん）＜ 1877 年（明治 10 年）－ 1945 年（昭和 20 年）＞とといいます。

「季語に遊ぶ」では前 11 回、西洋美術と俳句の組み合わせを試みてきました。

第 12 回の今回は『枝垂れ桜に燕』『竹に雀』『柘榴に鸚鵡』『踊る狐』など人々の身近に咲く四季折々の花々、愛らしい鳥、獣たちの命かがやく瞬間を木版画とは思えないほど美しい色彩で描き、花や鳥という小さな命に注がれた温かい眼差しを感じさせてくれる小原古邨。

そんな彼の作品から感じられる季節順に掲載し、その作品に合う俳句を選びました。

なお、昭和以降「古邨」「祥邨」「豊邨」と号を使い分けています。

コロナ禍で疲れたところを癒してください。

1. 『枝垂れ桜に燕（しだれざくらにつばめ）』



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Koson - two-barn-swallows-on-blossoming-cherry.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Koson_-_two-barn-swallows-on-blossoming-cherry.jpg)

378 mm × 194 mm

まだ蕾（つぼみ）の目立つ枝垂れ桜の枝に二羽、たぶん番（つがい）の燕がとまっています。
 その燕がまるで笑っているかのようにこちらを見えています。
 枝垂れ桜は華やかな色彩で細密に描かれ、燕は写實的に描かれています。
 燕は人家の軒先などに巣を作り、飛びながら昆虫を食べてくれる益鳥（えきちょう）として、特に農
 家からは幸せを運ぶ鳥として喜ばれ、大切にされていました。
 土で営巣して子煩悩だし、寒くなれば虫を求めて南へ渡ります。
 いかにも現実的で、活気のあるところが庶民に好まれたのかも知れません。

ここでは晩春の季語である「初燕」を詠んだ句を選びました。

初燕見てよき駅や旅ごころ

河東碧梧桐（かわひがし へきごとう）（1873-1937）

初燕木々また朝をよろこべり

飯田龍太（いいだ りゅうた）（1920-2007）

球場に万の空席初燕

今井聖（いまい せい）（1950-）

2. 『竹に雀（たけにすずめ）』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Koson_-_tree-sparrow-and-bamboo.jpg

361 mm × 191 mm

かわいらしい雀の子が竹藪からひょっこりと出てきて、こちらを見えています。
 厄をついばんでくれる雀と若々しい青竹を組み合わせた作品。
 画面前方のまっすぐ伸びてゆく若竹を力強く色づけしていることにより、みずみずしい生命力を感じさせてくれます。
 「竹に雀」は慣用句として取り合わせの良いものとされています。

ここでは「竹」と「雀」を組み合わせて詠んだ句を選びました。

竹の雪ふるひ落とすやむら雀

正岡子規(まさおか しき) (1867-1902)

季語<雪>で晩冬

寿ぎに雀まいりぬ竹の春（寿ぎ＝ことほぎ）

星野麦人(ほしの ばくじん) (1877-1965)

季語<竹の春>で仲秋

篠竹の藪光り出す雀の子

津森延世(つもり のぶよ) (1946-)

季語<雀の子>で晩春

3. 『柘榴に鸚鵡（ざくろにおうむ）』（祥邨）



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Ohara_Shoson_Vogel.jpg

363 mm × 238 mm

鸚鵡の白い毛並み、眼、鼻、嘴（くちばし）、爪と柘榴の枝のモスグリーン、熟して赤く裂けた柘榴の実、中にはルビー色の種子がいっぱい詰っています。

背景は黒でかなりモダンな色づかいです。

鸚鵡の毛並みには空摺り（からずり、版木に絵の具をのせず強い圧力をかけて紙に凹凸を生み出す技法）が施されています。

版画ならではの味わいがあります。

ここでは、「鸚鵡」を詠んだ句を選びました。

放ち飼ふ鸚鵡がをりて花蘇枋（花蘇枋＝はなずおう、4月下旬、葉に先立って枝の節々に紅紫色の小形の蝶形花が固まって咲き、庭木や切り花用に栽培されています。）

高浜年尾（たかはま としお）（1900-1979）

季語＜花蘇枋＞で晩春



写真提供:ピクスタ
colors / PIXTA(ピクスタ)

春炬燵鸚鵡の真似をする人間（春炬燵＝はるこたつ）

中村草田男（なかむら くさたお）（1901-1983）

季語＜春炬燵＞で三春

さはやかや絵の中に添ふ白鸚鵡

吉野義子（よしの よしこ）（1915-2010）

季語＜さはやか＞で三秋

4. 『踊る狐（おどるきつね）』



<https://collections.mfa.org/objects/327605>

(Photograph © 2020 Museum of Fine Arts, Boston. All rights reserved. Gift of Mrs. Edward Jackson Holmes, RES.54.162)

349mm × 189mm

狐は昔から人とのかかわりが深く、昔話が日本各地に伝わり、文学や歌舞伎、能狂言にも登場します。

また、稲荷神社の神の使いとされ、鳥獣戯画には擬人化された狐が描かれています。

ここに描かれた狐も田楽法師がかぶる笠に見立てた蓮の葉っぱに耳を通す穴まで開けて、それを頭のにせて片足をあげながら楽しげに踊っています。

でも眼は結構真剣です。

写実的に動植物を描く古邨にしては珍しく空想の世界を取りこんだ作品です。

ここでは、愛嬌（あいきょう）のある「狐」を詠んだ句を選びました。

祭見に狐も尾花かざし来よ（尾花＝おばな、すすきのこと）

正岡子規（まさおか しき）（1867-1902）

季語＜尾花＞で三秋

姐さんの花に浮かれて狐拳（姐さん＝ねえさん、狐拳＝きつねけん、じゃんけんに似た狐、猟師、庄屋の三すくみの関係を用いた拳遊び）

筑紫磐井（つくし ばんせい）（1950-）

季語＜花＞で晩春、俳句において＜花＞といえば＜桜＞のことをさします。

ぼくじゃない狐も回る盆踊り

五島高資（ごとう たかし）（1968-）

季語＜盆踊り＞で初秋

5. 『月に秋草（つきにあきくさ）』



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Koson - moon-and-blue-flowers.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Koson_-_moon-and-blue-flowers.jpg)

374 mm × 190 mm

秋の七草、萩、芒（すすき）、葛（くず）、撫子（なでしこ）、女郎花（おみなえし）、藤袴（ふじばかま）、桔梗（ききょう）のうち、月に欠かせない芒、楚々とした美人のイメージの女郎花、ひときわ鮮やかな紫の桔梗と満月にかかるむら雲が描かれています。

浮世絵の摺り技法に、濃い色から薄い色へと次第にぼかしていく「ぼかし摺り」があります。

海や空などを描写する風景画の分野で多用され、この作品では月にかかるむら雲を、絵の具の自然な広がりにならせた「あてなしぼかし（当りなしぼかし）」で表現されています。

この技法で雲は動きを感じさせ、風が花々を揺らし、深まりゆく秋の気配を感じさせてくれます。

ここでは描かれている秋の季語である「芒」「女郎花」「桔梗」+「月」を詠んだ句を選びました。

名月へ色うつりゆく芒かな

久保田万太郎（くぼた まんたろう）（1889-1963）

夜にして月の出のいろ女郎花

森澄雄（もり すみお）（1919-2010）

月に供ふうぶむらさきの山桔梗（供ふ＝そなふ）

きくちつねこ（1922-2009）

6. 『公孫樹の落葉と鳩 (いちょうのおちばとはと)』



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Twee_duiven_bij_vallende_ginkgo_bladeren, RP-P-1999-453.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Twee_duiven_bij_vallende_ginkgo_bladeren,_RP-P-1999-453.jpg)

346 mm × 187 mm

秋になると銀杏（いちろう）の葉は黄葉を混じえ、やがて黄一色に染まって高い梢から散りはじめます。

見上げれば銀杏落葉と戯れる二羽の鳩。

輝きながら舞い散る銀杏の葉は鳩たちにとって恰好の遊び相手なのかも知れません。

寺社の境内、大学の構内、公園や街路など身近なところでこんな光景を見ることができるかも知れません。

ここでは銀杏の紅葉と散るさまを詠んだ句を選んでみました。

季節感の微妙な違いを味わってください。

鳩立つや銀杏落葉をふりかぶり

高浜虚子(たかはま きょし) (1874-1959)

季語＜銀杏落葉＞で初冬

とある日の銀杏もみちの遠眺め

久保田万太郎(くぼた まんたろう) (1889-1963)

季語＜銀杏もみち＞で晩秋

銀杏ちる童男童女ひざまづき

川端茅舎(かわばた ぼうしゃ) (1897-1941)

季語＜銀杏ちる＞で晩秋

7. 『月に木菟（つきにみみずく）』



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Koson - owl-on-ginkgo-branch-scops-owl-under-crescent-moon.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Koson_-_owl-on-ginkgo-branch-scops-owl-under-crescent-moon.jpg)

寸法不詳

木菟はフクロウ科の猛禽（もうきん）。
 頭部に耳のような羽角があるものが木菟、ないものが梟（ふくろう）。
 語源は「耳付く」からとされていて、古名は「つく」、「づく」。
 夜行性で野鼠や蛙などを捕食し、夜間、人里近い森などでホーホーと低い声で鳴きます。
 しばしば月を背景にして描かれ、橙色の虹彩（こうさい、瞳のまわりにある膜。伸縮して瞳の大きさを変え、網膜に達する光の量を調整します。）が特徴。
 この作品では三日月や枝葉にぼかしのテクニックを用い、対象的に木菟は橙色の瞳を大きく見開き、獲物を狙っている様が臨場感を増して伝わってきます。

ここでは、三冬の季語「木菟（みみずく、ずく）」を詠んだ句を選びました。

月光に槻は黄なり木菟の群れ（槻＝けやき）（木菟＝ずく）
 飯田蛇笏（いいだ だこつ）（1885-1962）

青天に飼はれて淋し木菟の耳（木菟＝ずく）
 原石鼎（はら せきてい）（1886-1951）

木菟やさみしきときは菰喫ふ（木菟＝みみずく）（菰喫ふ＝たばこすふ）
 三橋鷹女（みつはし たかじょ）（1899-1972）

8.『雪中の梅に黄連雀(せっちゅうのうめにきれんじゃく)』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Pestvogel_op_besneeuwde_tak,_RP-P-1999-450.jpg

331 mm × 179 mm

雪が積もりかけた白梅の枝に、冠毛も鮮やかな黄連雀がとまっています。
連雀は北方からの渡り鳥。
雪空の冷たい空気の中、白梅の清々しい香りに誘われてやってきたのでしょうか。
雀よりも少し大きく、大変可憐な感じの小鳥で、全体は淡い褐色できれいな冠毛があります。
尾羽の色で黄連雀と緋連雀を判別します。

作品とは季語の上で雪－晩冬、梅－初春と齟齬（そご）が生じますが、ここでは晩秋の季語である「連雀」を詠んだ句を選びました。

連雀を遠くとらへてまどろめる
斎藤玄(さいとう げん) (1914-1980)

雪林の朝日を浴びに緋連雀
堀口星眠(ほりぐち せいみん) (1923-2015)

山の子の風聴き分けぬ黄連雀
中西夕起(なかにし ゆき) (1953-)

私も『踊る狐』の版画から発想を飛ばして詠んでみました。

女狐も科よく踊る風の盆（科＝しな）

白井芳雄

季語＜風の盆＞で初秋

今回は「小原古邨、その版画と俳句」をお届けしました。

全体を通じての参考文献、出典：公益財団法人太田記念美術館監修・日野原健司著
『小原古邨 花咲き鳥歌う紙上の楽園』（東京美術）（2019 年）
ISBN978-4-8087-1129-0 C0071

小池満紀子著
『小さな命のきらめく瞬間 小原古邨の小宇宙』（青月社）（2018 年）
ISBN978-4-8109-1324-8 C0071

「知られざる木版画絵師（巻頭特集）」『版画芸術 第 35 巻 4』
（阿部出版）（2007 年）
ISSN1343-7399

飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修
『カラー版 新日本大歳時記 愛蔵版』（講談社）
ISBN978-4-06-128972-7

『角川俳句大歳時記 新年』（角川学芸出版）
ISBN4-04-621035-4 C0392

『角川俳句大歳時記 春』（角川学芸出版）
ISBN4-04-621031-1 C0392

『角川俳句大歳時記 夏』（角川学芸出版）
ISBN4-04-621032-X C0392

『角川俳句大歳時記 秋』（角川学芸出版）
ISBN978-4-04-621033-3 C0392

『角川俳句大歳時記 冬』（角川学芸出版）
ISBN4-04-621034-6 C0392

本間美加子
『日本の 365 日を愛おしむ』（東邦出版）
ISBN978-4-8094-1652-1 C0076

参考サイト：日本化薬(株)公式ホームページ・創立 100 周年記念サイト
「日本化薬と浮世絵」（<https://www.nipponkayaku.co.jp/100th/ukiyo/>）

フリー百科事典ウィキペディア (Wikipedia)

最後までお読みいただきありがとうございました。

（株）技術情報センター メルマガ担当 白井芳雄

本メールマガジンのご感想や本メールマガジンへのご意見・ご要望等 melmaga@tic-co.com まで、
どしどしお寄せ下さい。

株式会社 技術情報センター 〒 530-0038 大阪市北区紅梅町 2-18 南森町共同ビル 3 F

TEL : 06-6358-0141 FAX : 06-6358-0134 E-mail : info@tic-co.com